

「保健医療科学」
第51巻 第4号 予告

医療安全の新たな展望 ー各論ー

入院患者に対する誤訳予防システム構築.....	相馬 孝博
輸血事故予防パッケージ.....	河原 和夫
医療安全としての院内感染予防.....	藤澤 由和
出産における安全管理.....	武澤 純
観血的診療に対する患者安全方策の導入.....	相馬 孝博
精神科医療における安全管理.....	谷津 裕子
長期ケアの安全管理.....	伊藤 弘人
建築・設備から見た安全管理.....	小山 秀夫
ヒューマンファクターとエラー対策.....	小林 健一
質管理原論.....	飯田 修平
臨床指標ベンチマーキング.....	長谷川友紀

編 集 後 記

編集後記に書くような内容ではないかもしれないけれど、ま。

今朝、中堅どころと思しき研究者に「編集後記に何を書いたらいい？」と聞いた。そしたら、「これからの国立保健医療科学院はどのような方向に進んだらいいんでしょう」という答えが返ってきた。「わからないなら自分で進むべき方向だと思おうほうに進んだらいいじゃないか」と、私はたちどころに答え、「確固たる方針が欲しいのか？そしたらそれに従うのか？大統領がやるといったら、何が何でもやるのだ、という国がいいのか？」と続けた。

本当はその後に、「弱い国を見つけてなんだかんだと難癖をつけ、膺懲¹⁾と称して侵攻するのは、かの懐かしき大日本帝國のやり方を辿っているのだろうか。もっとも大日本帝國をお手本にしているのは、北朝鮮も同じだけだね。戦後50年以上を経て大日本帝國を見習う国が2つも出たとは誇るべきことではないか」と皮肉を続けたかったのだが。

前者の国は、われわれの世代が長年民主主義のお手本としてきた国であるが、わが国がこういう態度を続けていると次はわが国がテロの対象になるかもしれないではないか。「えっ、そうだな。それではいつまでも追従している訳にはゆかないのでは」という、慎重論（臆病論かな）も困る。本当に正しいと信ずることを行うならばテロをも恐れるべきではないのではないか。もっとも、避ける努力は十分するべきだが。

それでは、それにも関連して最後に編集後記らしいことをちょっとだけ。わが国がアジアに威を振るっていたころ、国立保健医療科学院の前王朝である国立公衆衛生院の研究には後ろめたいところはなかったのだろうか。中国では新しい王朝が古い王朝の歴史を編むことになっている。新しい視点で旧王朝の歴史を見直すことができるからである。ちなみに、清の歴史はまだ清史稿で（こういう名で販売されている。私も持っている）、中華民国も中華人民共和国も準備しているはずである。

われわれは国立公衆衛生院に後ろめたいところはなかったと聞いているが、それは前王朝の廷臣から聞いているのだから、新しい王朝の目で見直す必要があるかもしれない。国立公衆衛生院の紀要を丹念にめくる人はいないだろうか。

¹⁾ 磯野さんから註をつけてくれと言われたので。「膺懲」はこらしめ。大正から昭和の初めにかけて大日本帝國のいうことを聞かない隣国に向かってしばしば使われた語。

(箕輪眞澄)